

## 宝塔一基

合掌先生有難うございます。心からお礼申し上げます。南無阿弥陀仏！

お別れ致しましてから片身をそがれた様な、魚が水から上げられた様な、髓に食い入る様なさびしきで二十二日漸くとぼとぼと四面楚歌の地に帰りました。里がえりした嫁が、婚家へ帰った気持がこんなものではないかと想像します。当地の人々が先生を理解しないのは、先生があまり高すぎるので、「犬あり堯を吠ゆ」無理もない点もあります。がこれが□□の頭痛の種です。□□の努力の足りない所で、先生にも当地の民衆にも誠に相すまぬわけであります。

日蓮尊者のお話を思い出します。宝塔を一基、先ず□□自らを宝塔にしななければなりません。

□□は能動的に働きかけることが頗る下手で困ります。何時も何でも受け身で困ります。力の不足を歎けども、荷の重きことを歎かず。

さびしいにつけ、苦しいにつけ、先生の御名をよびます。否先生がよびかけて下さいます。先生と如来とは、□□においては一体にてまします。

正法に遇うて身命を棄てざる我を慚愧せむ。漸づくばこの道理をはづべきなり。

××県××郡××村臨濟宗東福寺派二等地××寺住職にして七派連合（東福、建仁、南禅、相国、大徳、天龍、永源、・・・妙心を除く）布教師たる××師の話に、小生等と同参なりし友の、あるいは京阪に、あるいは九州に、それぞれ皆、大地名鑑の住職として、俗衆の供養と恭敬とを得て、福々として暮している由、又七派布教師になれば、春の巡教中は、本山よりの手当て日に二円五十銭、各開教会所からの謝礼を合わせれば、日に×円にはなる由、本山巡教師は管長の御名代というので、如何なる長老耆宿よりも上座に招じられ、緋毛氈に高茶台の厚遇等々、色々聞かされ、妙心寺派はそれよりもまだ割がよろしいから貴公も××派布教師になれとすすめられました。恥しながら□□はその話を聞いて、さもしくもよだれを流しました。

××寺の現状を思い、子供の将来を考え、何一つ買ってくれとも要求せず、牛馬の如く柔順なる貧苦にすすけたる荆妻を憶う時、喉から手が出る様でございました。

しかし不幸にして□□には布教師になるだけの学歴もなし、学歴不足お目こぼしの恩典に浴する賄賂の出所もなく、講習会とやら布教師練習所に出る費用もなし、本山へ上納すべき義財は滞っているし、また至極、無器用な男故、大向うの喝采をはくするような技量もなく、どの点から言っても此の栄達の道は閉ざされてあります。

実を言えば××問題なかりせば、授業寺たる××寺へさえ入れてもらわれぬ□□、癖は有り徳はなし、使い用のないガラクタ道具、誰も相手にしてくれません。そんな大地名鑑は、賢き人の競争場裡、□□如きは吸うても見られません。

××和尚の話聞いた時、恥しながらもさもしいことながら涎を流しました。涎を流して真暗くなったか。否涎を流しつつも痛快に南無阿弥陀仏と叫びました。涎を誠に念仏は生の凱歌である。

布教師も大地名鑑もほしからざるにはあらねども、私は今忙しい。

貧乏も非難も嫌だけれども、私は行かねばならない。

私は先生のみ教によつて如来を紹介せられた。その如来は□□を召す。

私は行かねばならない、貧乏はしても住岡狂風の弟子でありたい。地位はなくても如来の子でありたい。地位が無ければこそ、貧乏ならこそ、如来は我に來りたもうた。

「召されて行く身の嬉しさは つきせぬ泉のうるほひに

涙を清めて御名を称へつつ まことのみに歩まん。」（団歌）

四等地の貧乏和尚は、二等地の住職、七派連合布教師に一步の優越を感じました。「不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮べる雲の如し。」

やくぎな□□には今の地位でも分にすぎています。殊に何の取りえもないのに、先生はじめ団員諸兄弟が、ただ□□が先生のみ教を聞くだけの故をもつて、あの身にあまる御待遇「私は人を理解しないのに、人様は私を理解して下さる。」釈迦、親鸞の徳なく、釈迦親鸞以上の待遇を受く。勿体ないことです。如来をぬきにして何の地位ぞ、真実の教えをぬきにして何の富ぞ。

親子三人いづくの野のはて、山の奥にて、飢え死に凍えはつとも、如来とならば、何をか欺かん。我が師とならば何をか悲しまん。

やくぎなる□□をも如来は召す。如来に召されたる我なるが故に、我はやくぎなるの故をもつて我を軽蔑せず、我を呪わず、我、我を拝む。大地名鑑に住して俗衆の機嫌をとるをいさぎよしとせざる我を拝む。布教師となつてお茶を濁し、得々とし得ざる我を光栄に思う。

これが先生のみ教を聞かして頂かない前でもございましたら、こんな話を聞いた時、2  
 いらく悶々の情やる方なく、ヤケ酒をあおつて、真つ黒焦げになつて、四方八方へあたりちらして、その人をこきおろして目もあてられぬ悲惨なことになつていたのです。よし自業自得とわかつて、今度はそんな身分になり得ざる自分が呪いたくなつて、ますます立つてもいても身もよもあられず、自暴自棄の深淵へくくと墮ちて行つたに違いありません。

然るに何の幸ぞや、先生にあふことを得たり、先生のみ教を聞くことを得たり。先生によつて如来を紹介されました。先生の上に如来を見る。その如来は極めて、やくぎなる□□をも召す。如来に召されたる□□なるが故に、自己をも呪わず、人をも呪わず、實際この人には、□□よりも親切で、力があつて、徳があるのです。××和尚も□□よりはるかに親切です。私に会いたさに××まで来てくれました。人境相応してあります。ただ祖師にかえれ、歪曲されたる大法を正せ。大法を主とし、寺以下のものを従とせよと忠告するだけでございます。安らかな氣持、満ち足りた心、おちついた心境、のびやかな態度で、断然忠告することが出来ました。

七年ぶりの相見、とうとう三日間逗留、語りくらし語りあかしました。僧堂時代のこと、友達のこと、布教師のことなど話頭にのりましたが、彼は主に非常な興味をもつて先生のこと質問致しました。大いに先生のみ教え、並に団精神等、紹介し、頂いた「最後の日」と「真理への道」とを贈呈しておきました。

法衣はぬぎにくいもの、宗派の垣はなかなかこえられないものと痛感致しました。まだまだ高座から下りませんし、宗派根性にとらわれています。根底のない虚飾だら

けの、高座からひきおろし、無生命な宗派の埒を破って、この□□を召されし如来、先生へ今更ながら讃嘆と感謝とを禁じ得ません。しかし彼は、爺婆を瞞着すべくあまりに真面目で少し、僧侶教育家としての淋しさも感じていますし、善知識なきことをも欺いています。ただ前申すが如く法衣がぬがれませんかし宗派の埒が越されませんか。先生、何時かはく、必ず………。

昭和七年九月八日、秋雨降る××寺の庫裡で、久しぶりにお師匠様だと感じさせられました。とかく、御法愛になれて、時によれば兄か友達位に思うことさえ、ありがちでございました。あの日全く先生がほんとうにお師匠様だと感じさせられました。

聴衆の前に立った時、これはすでに人の言ったことだ、或は、こんなことは平凡なことだと、自分を卑下してかかるのは、真理に不忠実な態度だと言う意味のことを仰せになりました時、頭がグウソと鳴ったほどこたえました。

「こんなつまらぬことを言ったって何の価値もありはしない。

そう感じた時、如何なる言葉も真理の屍になつてしまう。

如何なる時にも、如何なる人に対しても言い得るたつた一つのものを握っている。それが求道であらねばならない。」（聖光第四巻第九号）

という御教を受けているはずの私でございましたのに、全くみ教を反古にしています。恐れ入る次第でございます。それというの、人に教えるという態度がいけなかつたのです。皆様と共に私自身がみ教を味わ、して頂くのであつたなら「一回挙着すれば一回新なり」で何度くり返しても汲めどもつきぬ味がございますのに。真実<sup>3</sup>の教は、一言一句も、どこを切つてみても一言一句が真理に根ざし、如来の胸底より流出し、滴々血潮をもつて説かれ、血潮をもつて体験せられ、千辛万苦して、全人格から全人格へ伝えられたもので、一言を耳にふるれば身を粉にしても聞き、骨を砕きても謝すべきはずのものを、何という無礼な、ウカツな態度でございましたでしょう。相すみませぬ。真理を蹂躪るものは、先ず第一に□□自身であつたのでございます。

あの時の先生のお言葉は、誠にやさしくやはらかで静かでございましたが、百雷の一時に落ちたほど、私の鼓膜にひびきました。

当地における団運動の不徹底なもの、□□自身の自信の不足にあり、自信の不足は求道の不足、求道の不足は真理に対する態度の不忠実なるにあり。如何に殊勝らしく装うともただこの一事、□□の正体を曝露してあまりあり、漸汗々々。

随行中不満な点や、欠点が見つかったらば遠慮なく言えと仰せになりましたので、何かないかと随分さがしましたが、残念ながら見あたりません。今少し師匠ぶつて頂ければ兄か友達のように思うことがなくてよからうと思はれます。

「人に理解されざることをなげかず、人を理解し得ざる我をなげく」の一語、有難く頂戴致します。先生は私が要求する以上に私を理解して下さいます。不平どころか不満どころか身にあまる愛の負債を重ねるばかりでございませぬ。御親切なる御教化は申すに及ばず、御×まで頂きまして……中略……。

誰も買手のない男を、そつくり言い値で、否、言い値以上に買うものは如来と先生のみ。先生買ひませし故に、団員諸兄姉もまた買ひませり、実に／＼この度の巡礼何処も／＼身にあまる御待遇、もつたいないこととございます。思わず長文句をならべました、乱筆のほどお許し下さいませ。どうぞ御大事に遊ばして下さいませ。皆様におよろしく、南無阿弥陀仏。

九月二十五日

□□ 合掌

恩師白蓮座下

一切衆生と共に

九月二十六日本部に帰る。机上におかれた約四十通の手紙に読み入った。ここに書いたのは、その中の一通である。一枚読み二枚読む間に、これは誰から誰に來たのであるかも忘れて、唯、手紙の中に盛られた至純なる生命の高き旋律に誘われて茫然と読みふけた。再読した。熱いものがこみ上げる。三度読む。嗚呼、思わず感嘆の声を発した。一切の私情を殺して、この真摯にして尊嚴なる仏心印伝持の求道者の教えを受けんとするものである。

かかる尊嚴なる文章を受くべき人を知らず、おそらくは一切衆生の共に味うべきものである。受けたる者よりも、かかる世界に生き給える人こそ、最も幸福なる人中の妙好華、遙かに合掌してその「絶対帰依三宝」の大信海を憶念せずにはいられない。

買う人なし

梁の武帝は、仏教を研究し、寺院を建て、僧を供養し、多くの經典の注釈数百巻に及んだが、さて肝心要な生命の火が燃えていなかった。龍を書いて眼が入れてなかった。その武帝が、達磨大師に問いかけた。

「如何。聖諦第一義。」

（仏教の至極、この上なしという所を承りたいという意）

園悟老師はこれを野次つて「何を答うぞ、愚鈍な馬鹿野郎！」とどなった。少しのことが鼻にかかつて徒らに問う者ならば、黙殺が一番、自己を忘れて、心のやむにやまれぬ願いでもないのに、かかる問いを發する、叱られるのが当然である。

だがこうしたことを一生一度も問うて見る人さえ生まれではないか。ましてや、□□師の如く、地位も、名誉も、財欲をも超えて、魂の底からこれを求めて体解せずばと一生を通じて至心求道三昧に生きようとする者、幾ばくありや。

武帝としては、精一ばいの問いである。たとえ「驢馬をつなぐ杭ほどのつまらぬものを持ち出したな」と笑われようとも。達磨大師は叱りつけて言った。

「廓然無聖」

廓然はからりとして何物もない貌。無聖は聖なし。法界本来、廓ほがらにして一塵たたず、凡だの聖だの、そんなものがあるものか。武帝は思ったのだ。「はるばる南天竺から來たこの御仁、何か多少は珍らしい答でもするにちがいない。」正法に真に眼の開かない者には何でも平凡である。従つてめづらしいもの奇特のものはないかとうろろする。だが答えは簡單「廓然無聖」、仏だの凡だの二つに仕分けて困っている者

や、仏臭く構えたものにはいい葉ぞ。大聖の鋭い矢は放たれた。どこへ一体おちるやら。それにしても達磨の答は明月の如く明白至極。

如何なる尊い千言万語も、馬の耳には風に等しく、猫の前の小判は鯛ほどの価値もない。南無の機のない者には、阿弥陀仏の味はわからず。阿弥陀仏のいない所に南無の耳は不必要。南無と阿弥陀仏は一体だからである。真理は如来のもの、智慧も如来のもの、合掌も求道もない武帝の亜流が、尊い真理を試験勉強の点取り道具や、布教師資格の梯子にして、あとは正法の殻をいじって平気なもの、正法が人間に生きるのか、人間が正法を弄るのか。

廓然さえもすてはてた、正切正銘の「無聖」凡夫のぢゞばゞが「私には仏様がいなさりませぬ。死ぬる私にお聞かせ下さい。」と出かけたなら、達磨大将だつて逃げ去る必要もなかったかも知れぬ。がらくたものを後生大事と身につけた武帝の亜流が、□師よ御地に満ちているのではありませぬか。正法を遠ざかること百由旬、達磨大将を行かしたとて逃げることに必死。かつて何ものも持ち合せのない正銘の無聖凡夫こそ、廓然、或は野狐精の対機たり得るか。

そこで武帝はやりかへた。

「帝曰対朕者誰」

今、朕に向いおうている者は一体誰かと問うたのだ。恥の上ぬりである。だが、「満面の漸強強いて惺々」実に赤面の至り、慚愧して身のおき所もないはずと思いの外、強ひてしらすらしくよそおい、虚勢をはつて、よくもく問うた者、それほど、おのれを忘れた阿房に達磨の金的を射得るものか。見ろやられるから。果して然り、

「磨曰。不識」

ダルマは「識らない！」とどなった。前にも「廓然無聖」と出して見ても猫に小判、今又「不識」と売りつけても「咄！ 再来半文銭に直らず。」武帝は一銭どころか、半文銭にも買つてくれない。

□師よ。師の長文、この野狐精を泣かしめるに余りありと雖も、狐なるが故に武帝すら買わず、和尚を買わざること、「再来不直半文銭」再来どころか、五来、十来すとも買手あるはずなし。よろしく無為山に入つて壁にむかつて面壁九年、否、愚禿底に唯お念仏こそよけれど存ず。

「帝不契」

あゝおいしいことをした。契わないのが、犬に糞ほど似合うたこと、うっかり達磨大師にのせられて瞞着でもされて何かにふれでもしたら、それこそ大変、凡も聖もあるものか。うっかり、馬鹿がさつた気で、契うたなどとやらかしたら却つて、瓦をつかんで、金だとあやまる。

だが瓦を瓦と知つたのなら間違いないが、瓦が金の真似をする。七派連合大布教師に涎を流しつゝも、なれない男と別れた後は、存外もつても淋しく、やがて多くの西瓜組ともお別れして、汽車の窓に唯一人ポカンと窓外を見つめる。秋来ること明白「体露金色」はお学者にも、大地名鑑にもなくて、却つて哀れにも別離の涙に、東と西、唯見送り見かえず、買手のない四等地の西瓜と、教員の古手の上であり、ポカンと見やる車窓にあり。

「達磨逐渡江至魏」

達磨大師も武帝にはかなわぬ。揚子江を渡つて魏の国に入り、嵩山の少林寺に引きこんだ。「この野狐精、達磨の古狐の大げなもの奴、一場の大恥をかきおつた。」とは園悟禪師という古狐の言葉。大野九郎兵衛に由良之助の腹はわからぬ。

狐でなくては狐とは罵られないもの、さるにても「西より東にすぎ、東より西にすぎ」て衆生済度は御苦勞様。

「帝後拳問志公」

武帝はどうも気にかかるので、後に、宝志和尚（志公）に問うた。貧乏人が古い借金を思い出したように。だが、流石、宝志和尚には眼があつた。

「志公云。陛下還識此人否」

志公（宝志和尚）はえらい。答えるかわりに問いかえした。「陛下よ、あなたは達磨がどんなものかわかりますかね。」園悟師は武帝を愚弄して「志公も、どうやら達磨と同じい野狐精らしいから、いつそのこと達磨と一緒に迫り出した方がよからう」と言い、さらに兎角四の五のとやかましい。「三十棒を与えてナグリ出せ。」「どうやら達磨が又も出て来おつた。」園公も亦なかなかの傑物だ。

「帝曰。不識」

武帝は「識らず」と答える。

先きに達磨の出した公案そつくり、武帝も亦「不識」とやったが、月とスッポン、とかく口まねの多いこと。釈尊の口まね、親鸞聖人の口まね、口まね禅やら、口まね念佛、口と心と違つていることさえもお気がつかない。造つた花を造花と言ひ、人語を6真似るを鸚鵡という。それを本物に見せかけようとする猿の浅智慧、いやはや凡夫の腐つたのは仕方のないもの、なぜあつさり投げ出せないか。

「志公云。此是観音大士伝仏心印」

観音菩薩を信仰しておかざる武帝にむかつて「達磨は釈迦付属の仏心印を伝えるために来られた観音の化身示現でありますぞ。」仏心印とは、仏の心印で、印は印可とか印証とかいう心で、確かに証拠だてること。「廓然無聖」だの「不識」だのとどなった達磨が、観音の化身、仏を確証するための御使だと聞かされては、武帝の驚きようが察せられる。「それにしても、志公の胡散くさい指示注釈ではある。」武帝に限つて、どれだけ聞かされようが、何の悟も開けないこと「臂が外に向かつて曲がらぬと同然である。」

「帝悔逐遣使去請」

武帝は後悔した。そこで使いを遣して迎えようとする。あの人を観音大士とあつては大変である。自分が会つては何やらわからず、人に聞かされてそうかと思う。智慧の眼のない者は困つたもの、「それ見ろ！ 武帝に観音や仏心印がわかつてたまるか。だから先きに愚鈍の馬鹿野郎と言つておいたじゃないか。」とは園悟和尚の皮肉だ。

「志公言。莫道」

陛下よ、そりやお気毒ながら駄目です。志公の口ぶりはまるで「東の家の人が死んだのを、西の家の人がおくやみをいうようだ」と評せられても仕方がない。

「闍国人去 他亦不回」

たとへ、この国の君臣ごとごとくをあげて迎えに行つたとて、再び回つては来られませぬ。さすがは宝志和尚である。園悟師は「志公は色々のことを言つて武帝をたぶらかす奴だ。達磨と同じ怪物だから、一緒にたたき出した方がいい。いつそのこと此奴にも三十棒を食らわしてたたき出したがよい。」と言ひ、最後に「知らず、脚跟下に大光明を放つ」と後学への親切である。嵩山に去つた達磨だけが達磨ではない。今ここにだつて宝志和尚という達磨がいるではないか。遠く江北まで達磨を求めなくても人々その現前脚下に大光明を放つていられるではないか。武帝のようなやり方は、百千万劫たつても一人の達磨にだつて会われはしない。

我がゆく道

以上はあまりに長かつたが、長い手紙をくれた男たちは知つて／＼知りすぎた碧巖集の一頁だ。

耳がつんぼだつたら、百雷が一時に落ちようと、何ともないはず。一言でも半句でも聞いているのがさぬ貴師の態度にこちらが一本。お腹の達者な腕白小僧、いくら食べきしてもケロリとしたもの。此奴の末こそ恐ろしいものだ。二等地がいやならせめて三等地なりと、それが嫌なら金をためるか。何かの悪魔が胃袋へ喰いついたら、武帝の亜流が出来て一寸こちらに安心出来るが、南無阿弥陀の金剛腹では、自力の悪魔の入りようもない。困つたことになつたものだ。武帝でさえも、達磨大師をやりこめて嵩山の中へおしこんだ。武帝の末流が何百何千、よつてたかつたら、そなた一人をおしこむ位は、朝食前、愚痴をこぼせばこぼす方が野暮というもの。

聖教まるのみの武帝の末流や「少奉戒律」の小善人に、絶対帰依三宝の法界の王者の呼吸のわかうははずがない。武帝の子孫には、地位や、衣や、学歴や、大地名鑑のがらくたが、澤山ついているほど買ひやすい。もしそうした世間で売りたいければ、急いで七派布教師におなりなさい。それが嫌なら「夢の世に同じ迷いにほだされたる人々に名を知られて何かはせん。さとりをきはめて仏の御前にて名をあげかし給へかし」源信和尚とならんで、母御のお叱りを素直に頂くがいい。

千手大悲も数えて足らぬ、前三三、後三三、「凡聖同居龍蛇混雜」の大無碍道が、現前脚下に開いて見れば「親しというも猶おろかなり、近しというも猶遠し。」廓然無聖なりと、観音大士なりと、仏心印なりと、違ふとなり、正しいとなり、何とでも勝手に言つたがいい。

非難もあたらず、賞讃もあたらぬ。

我がゆく道は一つなり。

宝塔

○宝塔一基ここに立つ 真如の柱ゆるぎなく

涅槃の瓦屋根高く 法性の池に水は澄む。

○一念喜愛の門入れば 入出往還の道広し

寂靜至徳の風そよぎ 帰依三宝の楽聞こゆ。

- 十方無量の諸仏たち 皆この宝塔に集います  
差別を差別のそのままに 仏性常住と輝けり。
- 罪は造れど罪ならず 苦患あれども苦にあらず  
光明徧照無碍自在 念仏衆生攝取不捨
- 自力の仮面ぬぎすてて 善悪賢愚の鎖たち  
久遠の業報蹴破つて 入れ安養の宝塔に、
- 春は指頭の梅にあり 一切衆生の生命なる  
弥陀願力の白道は 貪瞋二河の中にあり
- 金剛不壊の願心に 生死の苦界おりたてば  
無間の炎も蓮となり 八寒の氷も春と化す。
- 宝塔はそも何処立つ 時と処にへだてなく  
盡十方無碍光の み名の華咲く庭に建つ。

長々と御返事がおわかりました。御手紙を一切の希有人と頂きましたように、この返事も一切の妙好人を通して捧げます。何を書いたかよくわかりませぬが、あなたの好きな師匠ぶった所が多かつたかと思われませぬ。お大事になさいます。光明界裡、念仏のうちに毎日お会いしております。